

2021 年度日本天文学会天文教育普及賞

【授賞者】 山田 義弘（やまだ よしひろ）

【活動名】 日本各地の天文協会設立等による天文普及活動への貢献

山田義弘氏は、民間の測量会社である国際航業株式会社に勤務しながら、自治体の公開天文台等の設立設計を本務とする部門（天文施設コンサルタント事業部）を立ち上げ、北海道から沖縄まで、全国各地の公開天文台やプラネタリウム、科学館について 40 件以上の立ち上げに関わり、基本構想から調査（適地選定、測量、地質）、土木・建築設計、望遠鏡とプラネタリウムの機材選定、人材採用の業務委託まで広く天文学関連の教育普及施設を手がけてきた。業務の範囲は海外施設にも及び、東京大学のハレアカラ天文台や名古屋大学のなんてん 2 電波天文台等も手がけてきた。

これらの活動は民間企業の業務の範囲内ではあるが、山田氏の特筆すべき点は、ハード面でこうした施設を作り上げていったことだけではなく、行く先々で、数多くのアマチュア天文愛好家や同好会を結びつけ、ほぼ各県ごとに天文協会の新設に尽力したことである。1974 年から 2000 年にかけて、西日本を中心に 10 の県単位の天文協会を立ち上げている。全国の県単位の天文協会は 15 存在するが、その三分の二の設立に関わったといえる。設立の際にも、各地の天文同好会を訪ね歩き、あくまで自らは表に立たず、その地域毎に有力者を立てて、自らは黒子に徹した点は特筆すべきである。さらに天文協会を横に繋ぐイベントとして「アストロプラザ」を 21 回開催し、各地の天文協会を中心に 150～400 名近い会員や家族が参集した。これらの活動によってインターネットなどなかった当時のアマチュア天文家の交流が促進され、その人的交流の中から天文学関連施設の職員や新天体発見賞を受賞するアマチュア天文家も育ってきている。

また、天文観測資料保存の重要性も深く認識されている。日本国内の公的機関では受け入れられなかったハイレベルアマチュア天文家の半世紀を超える惑星スケッチを、独自に交渉し、アメリカ・ローウェル天文台に引き取ってもらうなど、貴重な天文学的な資料の保存にも尽力してきた。

以上のように、山田氏は天文学関連施設のコンサルタント業という本務とは別に、人的ネットワークを作り上げることで、多くのアマチュア天文家の交流を促し、天文学およびその広報普及教育に従事する後進の育成に尽力した功績は大きく、ここに 2021 年度天文教育普及賞を授与する。